


特集

# 言葉と楽しく、一歩ずつ

## 平成二十七年度版『国語』のご紹介

子どもたちに確かな力が身につき、
そして、学ぶ楽しさを感じられる、新しい教科書が完成しました。
今回は、新しい教科書の特長を取り上げ、その魅力を存分にご紹介します。

## 子どもたちが自在に活用できる国語教科書の創造

元国立国語研究所所長　甲斐睦朗

新版国語教科書は、子どもたちが、教室で先生の指導に従って国語を自在に学習できるように編集されています。「自在に」という用語は、長期的に、また、有機的に関連づけてという意味です。例えば、三年生以上の教科書には、目次に続いて「〇年生の学習を見わたそう」という見開きのページがあります。四月の初めに、子どもたちが先生に従って、自らの一年間の、上下巻に分かれている場合は半年間の学習内容を具体的に確かめ、心を向けるためのページです。子どもたちには、「見わたす」という言葉が、周りを見ることでなく、これからの学校生活に見通しをもつ、つまり、学習に見通しをもち、期待する意味であることに気づいてもらいたいと思います。

十数年前であれば、国語教科書の評価は、①豊かな文学教材や確かな説明文教材が何編も選定されている、②各学年の単元や小単元などが適切に配置されている、③六年間の学習内容が系統的に組み立てられている、④漢字をはじめとする言語事項が適切に配置されている、といった観点で国語教科書の質の高さや使いやすさが評価されがちでありました。しかし、学習の主体である子どもたちへの配慮が、この新版ほどに確かであったでしょうか。

現行の学習指導要領から顕著になったことですが、そうした平面図に書き込める観点だけでは教科書が評価できなくなりました。すなわち、その単元で何を学ぶか、どういう国語力をどのように習得できるかが、学習の当事者である子どもたちによく分かる教科書が求められているということです。現在、学習している単元・教材のある課題に取り組む場合、それに関連する事項が教科書全体から、あるいは前後する教材などから次々に立ち上がり、引き出されてくるしかけ（装置）が確実に用意されているかが問題になるのです。

そのことを「ネットワーク」という概念で説明してみましょう。子どもたちが、教科書の学習で何らかの事象に関心を寄せた場合、それがある文学教材の作者であろうと、単なる語句であろうと、教科書内の大小の関連項目、あるいは上位・下位項目、連続する段階的な事項との関係が学習者に見えてきて、その事柄がよりよく理解されていきます。新版国語教科書は、何よりも学習者である子どもたち自身を大切に編集されたと確信しています。

**かい・むつろう**

一九三九年、台湾生まれ。一九六一年、広島大学教育学部卒業。一九七三年、神戸大学大学院修了。愛知教育大学教授、国立国語研究所所長、京都橋大学教授を歴任。著書に、『読み解き源氏物語―桐壺巻の光と影―』（明治書院）など多数。光村図書小学校『国語』教科書編集委員を務める。